

我社中の花を論ずる事、甚至れり、花もまた奇巧を極て甚妙なり、目も至り花も妙々なるに隨て、花を論ずるの品位足らず、因て此秋は位を増し、菊重の陽數にとりて九段に極め、天真神奇には眞褒を加へ、絶倫亦褒の字を加ふ千百年の下にも、如斯花はあらしといへるに當りて、其妙品をおべしと、誠にかりの位を設け、花は天真に極るといへるも、此事ならずや、

寶曆十一辛巳年九月

菊翁述

菊の位

一位 諸々の花にくらぶるに、自然に立上りすぐれたるもの、一體の揃たる是を位と云ふ、牡丹は花の富貴と云、喜久は隱君子と云ふのたぐひに似る様にして、花の一體の上を云ふなり、二品 玄妙は玄妙の品、天真は天真の品ある類ひ、おのづからけ高見るを云、形手強し、透艶これ全く花の姿の上を云ふなり、

三輪 大輪なるかた最上なれども、中輪にても釣合能く、大輪に立ならびてもおとらぬを取るたぐひ也、あながちに輪の大輪にも限らぬを云、

四色 紅黄紫樺に限らず、くつきりとして勝れて能きを上とす、たとへば白もうつり白より雪白と云ふは格別なり、

五艶 色能くとも光りつやなければ、おのづから位品共に落るもの也、

六透 葩の間壹枚壹枚にわかれて見ゆるを云、かさね多く重ねてかためなるは、賤しきものなり、

七受 一輪の花形の釣合を持つ、うけ込かへるこゝろ也、花形の正しきを云、玄まりの能きといへるも、大かたは請によるなり、

〔古今和歌集五〕寛平御時秋きくの花をよませ給ふける

としゆきの朝臣